

7階 企画ギャラリー、アートカフェなど 9:30~17:30(入場は17:00まで)
会期中無休 一般1,200円、高大生1,000円、小中生600円、未就学児無料

あじびの夏の風物詩「絵本ミュージアム」これでファイナルとなり、来年からは新たな子ども向け企画が始まります。絵本展の初回からずっと中心で支えてきた高宮由美子さんにお話しをうかがいました。

「絵本ミュージアム」の長い物語の終わり、そして次の未来へ
あじびの夏の風物詩となった絵本ミュージアム。2007年の初開催から1回も途切れなかつたんですよ。はい。でも初期の頃は方針が定まっていなくて、2年目は「不思議の森のミュージアム」と題して水木しげるさんの「妖怪大冒険」展を同時開催し、3年目にまた「絵本ミュージアム」に戻りましたが、4年目の2011年に、絵本の世界を体感しながら美術や造形、先端技術を活用したデジタルコンテンツの体験、絵本とのコミュニケーションを楽しむ今のスタイルが確立しました。こんなに長く続ける計画はあったのですか。もとは西日本新聞創刊130周年記念の子どものための企画展として開催された展覧会でも、当初は1回限りで終わるはずでした。ですが、16日間で4万2千人も来場してくださり、その反響のすごさは、2回目も開催して欲しいというエネルギーになりました。産官学民の分野を超えた協働のプロジェクトによる子どもたちのためのオリジナルの企画展を、17年間継続開催するという全国的にも類がない独自の展開をしてきたことは、絵本ミュージアムの大きな特徴だと思えます。2020年に新型コロナウィルスの影響で全国の美術館が一斉に休館したときも、「おうちで！絵本ミュージアム」としてオンライン開催しましたよね。リアル展示ができなくなったと決まったとき、多くの関係者が「ここで絶やしたらいけない」と強く思い、できることをやってコロナ禍を乗り越えようと企画を進めることになりました。

絵本ミュージアム以前から子どもに関わる活動をしていた中で、子どもが育つたり活躍する様々な空間の一つにミュージアムの可能性をずっと感じていました。絵本ミュージアムは、「子どもとミュージアムをつなぐ」ことをコンセプトにしています。絵本展の「絵本ミュージアム」の3つをそれぞれ同等に価値あるものとして捉え、それぞれが持っている力



本展おなじみの絵本作家のいわいとしおさんがメインビジュアルを飾ります。



高宮由美子 (たかみやゆみこ)

NPO法人子ども文化コミュニティ・代表理事として、子どもと大人が共に学び合うコミュニティづくりに取り組み、「絵本ミュージアム」ほかたくさんのお仕事を企画、開催してきました。2022年より独立し、YES ANDの代表・プロデューサーとして活動している。



安達まや (Anandamayi) 1911-1991
Anandamayi (Anandamayi) 1911-1991
Anandamayi (Anandamayi) 1911-1991

あじび所蔵品が、ぞくぞく出展!

あじびで開催した2012年の「魅せられて、インド。」展、そして昨年の「ヒンドゥーの神々の物語」展を覚えていますか? このときにご紹介した個人コレクター黒田豊氏の貴重なインド大衆宗教図像コレクションは、当館に一括寄贈されました。そのコレクションのうち約180点が今度大阪の国立民族学博物館でご覧いただけます。また、国立新美術館へも当館自慢の蔡國強の作品2点が出展中です。この絶好の機会をお見逃しなく。



黒田豊 (Kuroda Toyoshi) 1911-1991
黒田豊 (Kuroda Toyoshi) 1911-1991
黒田豊 (Kuroda Toyoshi) 1911-1991



蔡國強 (Cai Guoqiang) 1957-
蔡國強 (Cai Guoqiang) 1957-
蔡國強 (Cai Guoqiang) 1957-

国立民族学博物館「交感する神と人―ヒンドゥー神像の世界」
9/14(木)~12/5(火)

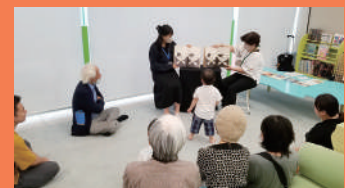


国立新美術館「蔡國強 宇宙遊-〈原初地球〉から始まる」
6/29(木)~8/21(月)



読み聞かせ「絵本でアジアを旅しよう」開催

古今東西、アジアでもたくさん絵本が出版されていますが、とくに面白い絵本を出している国・地域の絵本や紙芝居を紹介するシリーズ企画です(全4回)。日本語での読み聞かせはもちろん、とりあげる絵本の国の言語での読み聞かせもおこないます。その国の言語で聞くと、いつもとは挿絵の感じ方、想像のふくらみ方が違ってくるかも!?



7月に開催した「1回目 韓国の絵本の日」の様子

- 2回目 台湾絵本の日 10/8(日)
3回目 スリランカ絵本の日 2024/1/14(日)
4回目 タイ絵本の日 2024/3/10(日)
※参加には事前申し込みが必要です(右の応募フォームをご利用ください)



応募フォーム



ナリニ・マラニさん



ナリニ・マラニ (Nari Ni) 1999-2000
ナリニ・マラニ (Nari Ni) 1999-2000
ナリニ・マラニ (Nari Ni) 1999-2000

インドの美術作家、ナリニ・マラニさんが「第38回京都賞」の思想・芸術部門で受賞されました。ナリニさんはあじびの第1回(1999年)レジデンス・アーティスト。福岡では半年間滞在し、映像インスタレーション《ハムレットマシン》を制作しました。また、レジデンス以後も「アジアをつなぐ一境界を生きる女たち」展(2012年)への参加、福岡アジア文化賞受賞(2013年)など、当館が常に注目しているアーティストのひとりです。この度の受賞、心よりお祝い申し上げます!

Welcome to Ehon Museum 2023



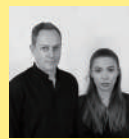
AJIBI NEWS FUKUOKA ASIAN ART MUSEUM

vol.91

2023年度 福岡アジア美術館アーティスト・イン・レジデンス
Fukuoka Asian Art Museum Artists in Residence 2023

I期アーティスト [7月~9月] Part I [July - September]

アムステルダム (オランダ)
ジン・チェ
トーマス・シャイン
Amsterdam, Netherland
Jin Choi & Thomas Shine



東京
清水美帆
Tokyo
Shimizu Miho



福岡
山本聖子
Fukuoka
Yamamoto Seiko



《レース》2016年 (アムステルダム・ライト・フェスティバル)
THE LACE, 2016 (Amsterdam Light Festival)



グエン・バン・クエンとの共作《スクリーン》2020年
Screen in collaboration with Nguyen Van Quyen, 2020
Photo by MAP/Heritage Space



《黒の先に落ちた赤―“おやすみ、いい天気だね。”》2020年
Red which dropped on tip of Black - "Good night, Good weather, isn't it??", 2020

光を巧みに用いた作品や人型の送電線など、これまで大型のパブリックアートを数多く手掛けてきたアーティストユニット。近年ではレース編みされた立体作品を屋外や川の上に設置し、公共空間へ詩的な介入を試みています。福岡では市民や学生たちとコミュニケーションを重ね、大型のインスタレーションを旧舞鶴中学校の体育館内に共同制作します。ライイベントや映像作品の舞台セット、衣装などを手がけてきたアーティストで、近年は、夢、人形劇、風(たこ)などをテーマに、地域コミュニティや専門家との交流を重ねています。福岡ではベトナムの職人と制作した「風」を出発点に、九州の伝統的な風文化をリサーチし、人々との出会いやストーリーを反映した作品を創作します。子ども時代を過ごしたニュータウンでの生活や違和感から、表現を立ち上げてきたアーティスト。福岡では、これまで関心を持ち続けてきた「鉄」や「団地で育った身体」をテーマに、明治以降の産業近代化についてリサーチし、人々の身体性が時代とともにどのように変容してきたのかを映像インスタレーションとして発表する予定です。

Information

アーティストに出会える アーティストたちはArtist Cafe Fukuokaを拠点に滞在制作をしています。ぜひ、その現場に足をお運びください。
作品に出会える

アーティスト・イン・レジデンスの成果展

「FaN Week」に合わせてI期アーティストたちの滞在制作の成果を発表します。福岡での様々な出会いが詰まった作品をお楽しみください。
今年も開催! FaN Week
彩りにあふれたアートのまちを目指し、福岡市が推進するFukuoka Art Next. そのメインとなるFaN Weekが今年も開催。レジデンスの成果展以外にも、市内各所で様々なアートイベントを繰り広げます。

会期 9/16(土)~ ※詳細はホームページをご覧ください
会場 Artist Cafe Fukuoka(11:00~17:00、月曜休)ほか
観覧無料

アーティスト・イン・レジデンスの詳細



Artist Cafe Fukuokaの詳細



詳細はコチラ



II期: 10月~12月 Part II: October - December
[参加作家] チェン・ウェイチャン(台湾)、古賀義浩(福岡)



Artist Cafe Fukuoka
(福岡市中央区城内2-2-5三の丸スクエア内)



For the latest articles in English, please visit the FAAM website.



https://faam.city.fukuoka.lg.jp/

7.8F, Riverain Center Bldg., 3-1 Shimokawabata-machi, Hakata-ku, Fukuoka, Japan

あじびニュースvol.91 2023年8月10日発行 企画・編集・発行:福岡アジア美術館
編集・執筆:木下貴子(CXB) デザイン:長末香織 印刷:株式会社四ヶ所

# 水のアジア

担当学芸員による作品ガイド  
(趙純恵、栗原ふみ)



ムルヤナ (インドネシア)《海の記憶》2018年  
Mulyana (Indonesia) *Sea Remembers*, 2018

ムルヤナさんは共同作業を得意とし、本作もジャカルタの村に住む70人の女性たちと作りました。浅瀬から深海まで海をまるごと一つの世界観に落とし込み、浅瀬に生息する色鮮やかな魚や珊瑚、海藻を表現する一方で、深海の海底で眠るクワラの骨もあり、生と死の共存が描かれます。ポップで親しみやすい作品ですが、ムルヤナさんは本作を通して自然破壊に対する危機感を訴えていて、海をこのように美しく表すことで、逆に世界の海の現状を考えるようなアプローチがなされています。(趙)

## 空中を回遊する5,000匹もの魚たち

ジュン・グエン＝ハツシバ(日本/アメリカ/ベトナム)

《メモリアル・プロジェクト ナ・トラン、ベトナム－複雑さへー 勇気ある者、好奇心ある者、そして臆病者のために》2001年



Jun Nguyen-Hatsushiba (Japan/America/Vietnam)  
*Memorial Project Nhatrang, Vietnam: Towards the Complex –For the Courageous, the Curious, and the Cowards*, 2001  
撮影したのはベトナム中部のニャチャンという都市で、ベトナム戦争終結後、多くのポートビュールがここから脱出し、その中には海に沈んでしまった方々もいます。ベトナム戦争後、労働者たちの貴重な稼ぎ口になったシンクロをこの海に沈め、それを若い漁師たちが海中で漕ぎ姿が映し出されます。漁師たちが息をするために海面に上がってはまた潜るという動作を何度も繰り返す様子が印象的です。制作から約20年を経て、ハツシバさんが本展に寄せてくださったテキストとあわせて、会場でじっくりご覧ください。(栗原)

アン・シェンホエ エレン ルルアン  
安聖恵／峨冷・魯魯安 (台湾)

《アリ・サベ・サベ／土石流、私は未来ですべてを想う》2021年  
Eleng Luluan (Taiwan) *Ali Sa be Sa be / Rugged Rock Cliffs, I Miss Everything in The Future*, 2021

安さんは、台湾の先住民族のひとつ「ルカイ族」に生まれました。ルカイ族は山岳民族で、山から採掘した薄い石板を建築材にして暮らしていましたが、2009年に台湾南部を襲った「八八水害」により、一夜にして村が土砂に飲み込まれてしまいます。その後、別の村で暮らし始めますが、安さんは10年後に元の村に戻りこの作品を作りました。上から吊るした網のようなものはルカイ族が住む雄大な山々を、下の編み物は村や家、水の流れを表現しています。安さんはこの作品を通してルカイ族の記憶を残していくと同時に、悲しい記憶を乗り越えようとしているのです。(趙)

## サテライト会場(ポートルース福岡)に展示！

安聖恵／峨冷・魯魯安 (台湾) 《そこにある海》2023年  
Eleng Luluan (Taiwan) *The Sea Over There*, 2023

福岡にちなんだ「サバ」のペンチ。なんと横幅10メートルもあり、もちろん座ることができます。(栗原)

本作の骨組みは台湾から、表面の竹は熊本県から調達しました。日台コラボレーションともいえる作品です。(趙)



海や川、水滴といった水の姿は、表面から見ると美しく光り輝いています。しかし、海の中には光が届かない暗闇もあり、また様々なストーリーが包み込まれています。本展はそんな光と影が共存する水の世界をイメージして構成されました。作家たちのみずみずしい表現の奥に込められた、その想いとは。

アフ [アフザル・シャーフェー・ハサン] (モルディブ)《モルディブの物語》2012年

Afu [Afuzal Shaafiu Hasan] (Maldives) *A Maldivian Tale*, 2012

この作品は、近代化以前のもルディブのとある漁師一家の1日をサウンドアートで描き、アニメーションにしたものです。当時、モルディブでは漁が生計の中心であり、海は恵みを与える存在であるとともに、時に人間の脅威にもなる存在でした。作品では、海に出た父親の帰りを待つ家族の愛情や、大海原を前にした人間の孤独感などが詩的に描かれています。アフさんは砂にもこだわりがあり、モルディブのビーチでとれる珊瑚砂を使っているそうです。光に透ける砂のグラデーションが非常に繊細で、とても深みのある映像です。(栗原)



キム・ヨンジン (韓国)《液体-右から左へ》1995年 Kim Youngjin (Korea) *Fluid-Right to Left*, 1995

映像に見えますよね？ですが違います。作家手づくりの装置が運動し、ポンプから放水された水滴がプロジェクターのレンズに落ちて拡大投影される仕組みです。実際に展示室の中で水滴が落ちる様子を極端に拡大して見ることになるため、自分が小人になったような気持ちになり、私たちがふだん忘れている「自然の前において人間はちっぽけな存在である」という感覚を呼び覚ましてくれます。(趙)

実際に見ると、水滴に触れるような錯覚になります。溜まった水滴は刻々と流れ、循環し続けるので、2度と同じ瞬間はありません。まさに生の体験を楽しめる作品です。(栗原)



## ひさみ

比佐水音 (福岡/京都)《いきてはいたる》2019年 Hisa Miwo (Fukuoka/Kyoto) *To come and arrive upon*, 2019

開館から24年経ち、「アジアとは何かを問う」ことが今後のあじびのひとつの姿勢になると感じています。そのうえでアジアを向いて制作を行う日本作家の表現は欠かせず、今回、3名の日本在住作家に出品してもらいました。比佐さんは水や雲のように手で掴めないもの、形を変え続けるものをテーマに制作を続けています。(趙)

現実の景色ではなく、比佐さんの心の中に浮かんだ景色が表現されています。何十回、何百回と繊細に筆を重ねて描かれており、画材も細かく使い分けられていて、例えば月の辺りなどは雲母や水晶によってきらきらしています。また、水面もよく見ると古い絵画の表現を引用していて、日本画の伝統へのこだわりが随所に見られます。(栗原)



## キム

金サジ (京都)《膳》2014年

Kim Sajik (Kyoto) *navel*, 2014

金さんはご自身が在日コリアンであるという背景から、朝鮮半島より伝来した舞や踊りや歌に着想を得ながら、宗教や祭礼空間を自分で造形し、それらを撮影した写真シリーズを発表しています。本展ではそのうち3点を展示していて、この作品では無数のセミの抜け殻が水上に置かれ、そこから一本の蓮が伸びています。現実では交わることはないふたつの生き物が水面に浮かぶその様子は、生と死のふたつを静かにかたどっているかのようです。(趙)

## やまうちてるえ

山内光枝 (福岡)《信号波》2020-23年 Yamauchi Terue (Fukuoka) *Signal Wave*, 2020-23



山内さんは、これまで黒潮やフィリピン近海、対馬暖流の島々の人と作品を作ってきました。山内さんが韓国釜山で出会った海女が「チュンジャ(春子)」さんといい、山内さんのお祖母さんも「ハルコ」だったという偶然の重なりから物語が始まります。日本統治下の釜山で生まれ育ち、終戦で引き揚げた祖父母を中心とした家族史、そこから見えてきた日韓の近代史をセルフドキュメンタリー映像で綴っています。最後には山内さんが、日韓の歴史を引き受けながらまた海を通じて何を見たいのかという、決意表明のようなものを感じる意欲作です。(趙)



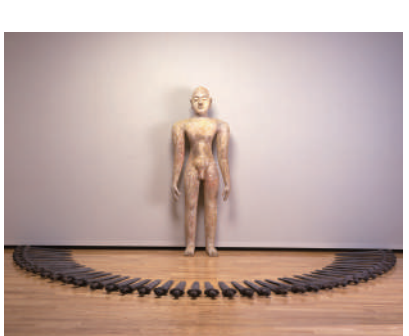
イー・ブル(李龍)《さなぎ》2000年  
Lee Bul, *Chrysalis*, 2000



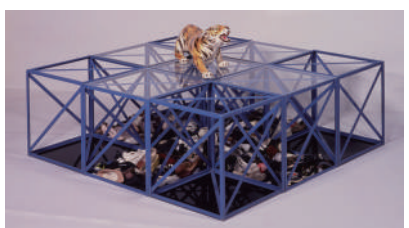
リン・ティエンミャオ(林天苗)《卵 #3》2001年  
Lin Tianmiao, *Spawn #3*, 2001



ディン・キュー・レ《南シナ海ピシュン》2009年  
Dinh Q. Le, *South China Sea Fishcun*, 2009



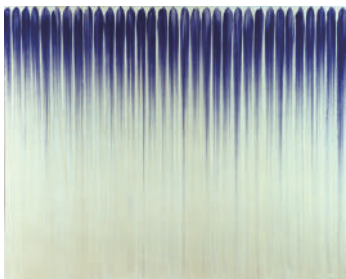
N.N.リムゾン《内なる声》1992年  
N. N. Rimzon, *The Inner Voice*, 1992



ラシード・アライン《ティグリス》1992年  
Rosheed Areeen, *Tigris*, 1992



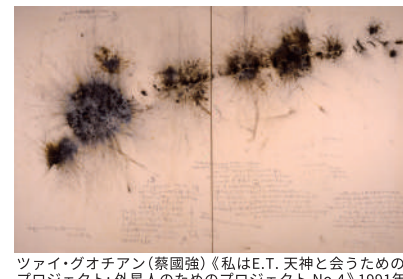
ナリニマラニ《略奪された岸辺》1993年  
Haini Malani, *Despoiled Shore*, 1993



イー・ウーファン(李禹煥)《線より》1977年  
Lee Ufan, *From Line*, 1977



ジャン・シャオガン(張曉剛)《若い娘としての母と画家》1993年  
Zhang Xiaogang, *Painter with Mother as a Young Woman*, 1993



ツァイ・グオチアン(蔡國強)《私はE.T. 天神と会うためのプロジェクト: 外星人のためのプロジェクト No.4》1991年  
Cai Guoqiang, *I am an Extraterrestrial: Project for Meeting with Terjin (Heavenly Gods): Project for Extraterrestrials No.4*, 1991



ファン・リジュン(方力鈞)《シリーズ2 No.3》1992年  
Fang Lijun, *Series 2 No.3*, 1992

# アジア、アートに、夢中になる！ あじびオールスターが大集合

## Fukuoka Asian Art Museum Collection FaN

コレクション室「アジアギャラリー」では、これまで所蔵品を通じて、アジアの近現代美術を歴史的な流れでご紹介してきました。しかし、この秋からの半年間は、いつもと違うアプローチで、現代アジアのアートに出会うことができる展示を準備しています。新しい魅力的な空間で、ぜひエネルギーあふ作品世界に夢中になってみませんか。

9/14(木)ー2024/4/9(火)

7階 アジアギャラリー 一般200円、高大生150円、中学生以下無料

昨年から始まったFaN(Fukuoka Art Next)事業をご存じでしょうか。

アートをもっと身近で日常的に出会うものにしよう、という取り組みです。とくにアジアのアートは、学校教育でも学ぶことがないため、日本や欧米に比べると知られていません。だからこそ、福岡にはアジア美術館があり、展覧会などを通してアジアのアートに身近に出会える場と機会をつくっています。「ピカソは知らんばってん、ジャミニ・ロイ<sup>①</sup>は知っとうと！と自慢する子どもを増やしたい」とは、その願いをかなえるべく中学校の先生に転職したかつての同僚の名言です。本当にそういう子どもや大人が福岡中に現れる日を夢見しています。FaN事業の一環である秋からの展示はきっと「アジアのアーティストを知っとる！」と自慢する子どもや大人を育てるものになるでしょう。展示する10作家のダイナミックな作品は、約5000点の所蔵品から選りすぐった当館コレクションの粋を集めたようなもので、いずれも「アジアのいま」を伝える力を持ちます。同時代の私たちにとって身近なテーマを表現しているそれらは、きっとアジアのアートに親しみきっかけを提供してくれることでしょう。いまを生きる、元気なアジアのアーティストにフォーカスした本展が、みなさまにスペクタクルな作品との出会いをもたらし、新鮮な体験と感動をお届けできることを願っています。

—— 担当学芸員: ラウンチャイケン寿子

## アートと環境ー人新世を生きる

9/14(木)ー12/25(月)

Art and Environment – Living in the Anthropocene

環境をテーマとした作品を通じて、変わりゆく地球に目を向け考えていきます。



キリ・ダレナ《トゥンクン・ランギット》2013年  
Kirin Dalena, *Tungkung Langit*, 2013

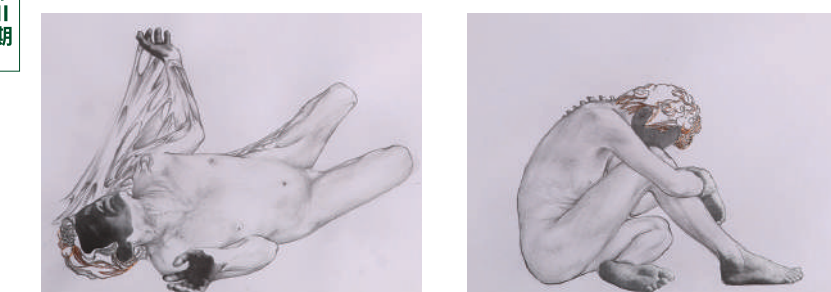
## 同時開催

## 「きのう見た夢」はどこへ?ーコビール・アフメッド・マスム・チステイ

9/14(木)ー12/25(月)

Room for FAAM Residence Program Part II  
Where has "The Dream You Dreamed Last Night Gone?" –Kabir Ahmed Masum Chisty

近年、パフォーマンスなどを通して国際的に活躍しているチステイ。2014年のワークショップで約150人の小学生と共同制作したアニメーション作品《きのう見た夢》を展示するほか、福岡での創作活動の一旦を紹介します。



コビール・アフメッド・マスム・チステイー《籠》2014年(部分)  
Kabir Ahmed Masum Chisty, *Cocoon*, 2014 (part)

あじびレジデンスの部屋Ⅱ期



①ジャミニ・ロイ《子鹿》1940年頃  
Jamini Roy, *Fawn*, c.1940  
\*参考作品  
\*reference



作者不詳(インド、マハラシュトラ州ローナーヴァラ)  
《トルマデナラーヤ》19世紀末〜20世紀前半  
Artist Unknown (India, Maharashtra, Lohnerwar)  
Toruma and Nayana, late 19th century - first half of the 20th century

## あじび所蔵品が、ぞくぞく出展！

あじびで開催した2012年の「魅せられて、インド。」展、そして昨年の「ヒンドゥーの神々の物語」展を覚えていますか？ このときにご紹介した個人コレクター黒田豊氏の貴重なインド大衆宗教画像コレクションは、当館に一括寄贈されました。そのコレクションのうち約180点が今度は大阪の国立民族学博物館でご覧いただけます。また、国立新美術館へも当館自慢の蔡國強の作品2点が展覧中です。この絶好の機会をお見逃しなく。



作者不詳(インド、タミルナードゥ州)  
《ナンノリ》20世紀後半  
Artist Unknown (India, Tamil Nadu)  
Nannoru, late 20th century



蔡國強(中国)《天長地久》(天の川) Project  
For Extraterrestrials No. 11》1991年  
Cai Guoqiang (China) Drawing for Immensity of Heaven  
and Earth: Project for Extraterrestrials No. 11, 1991

国立民族学博物館「交感する神と人ーヒンドゥー神像の世界」  
9/14(木)〜12/5(火)



国立新美術館「蔡國強 宇宙遊ー(原初火球)から始まる」  
6/29(木)〜8/21(月)



## 読み聞かせ 「絵本でアジアを旅しよう」開催

古今東西、アジアでもたくさんの絵本が出版されていますが、とくに面白い絵本を出版している国・地域の絵本や紙芝居を紹介するシリーズ企画です(全4回)。日本語での読み聞かせはもちろん、とりあける絵本の国の言語での読み聞かせもおこないます。その国の言語で聞くと、いつもとは挿絵の感じ方、想像のふくらみ方が違って来るかも!?



◀7月に開催した  
「1回目 韓国の絵本の日」の様子

- 2回目 台湾絵本の日 10/8(日)
- 3回目 スリランカ絵本の日 2024/1/14(日)
- 4回目 タイ絵本の日 2024/3/10(日)

※参加には事前申し込みが必要です(右の応募フォームをご利用ください)

応募フォーム



## ナリニ・マラニさんが 「京都賞」を受賞

インドの美術作家、ナリニ・マラニさんが「第38回京都賞」の思想・芸術部門で受賞されました。ナリニさんはあじびの第1回(1999年)レジデンス・アーティスト。福岡では半年間滞在し、映像インスタレーション《ハムレットマシン》を制作しました。また、レジデンス以後も「アジアをつなぐー境界を生きる女たち」展(2012年)への参加、福岡アジア文化賞受賞(2013年)など、当館が常に注目しているアーティストのひとりです。この度の受賞、心よりお祝い申し上げます!



▲ナリニ・マラニさん



《ハムレットマシン》1999-2000年  
Nalani Marani (India) Hamletmachine,  
1999-2000



# AJIBI NEWS

# FUKUOKA ASIAN ART MUSEUM

# 2023年度 福岡アジア美術館アーティスト・イン・レジデンス

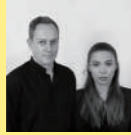
Fukuoka Asian Art Museum Artists in Residence 2023

I 期アーティスト [ 7月～9月 ] Part I [July - September]

アムステルダム(オランダ)

ジン・チェ  
トーマス・シャイン

Amsterdam, Netherland  
Jin Choi & Thomas Shine



《レース》2016年(アムステルダム・ライト・フェスティバル)  
THE LACE, 2016 (Amsterdam Light Festival)

光を巧みに用いた作品や人型の送電線など、これまで大型のパブリックアートを数多く手掛けてきたアーティストユニット。近年ではレース編みされた立体作品を屋外や川の上に設置し、公共空間へ詩的な介入を試みています。福岡では市民や学生たちとコミュニケーションを重ね、大型のインスタレーションを旧舞鶴中学校の体育館内に共同制作します。

## Information

### アーティストに出会える

アーティストたちは**Artist Cafe Fukuoka**を拠点に滞在制作をしています。ぜひ、その現場に足をお運びください。

### 作品に出会える

### アーティスト・イン・レジデンスの成果展

「FaN Week」に合わせてI期アーティストたちの滞在制作の成果を発表します。福岡での様々な出会いが詰まった作品をお楽しみください。

会期 9/16(土)～ ※詳細はホームページをご覧ください

会場 **Artist Cafe Fukuoka**(11:00～17:00、月曜休)ほか

観覧無料

アーティスト・イン・レジデンスの詳細

Artist Cafe Fukuokaの詳細



II期: 10月～12月 **Part II: October - December**

[参加作家] チェン・ウェイチャン(台湾)、古賀義浩(福岡)



**Artist Cafe Fukuoka**

(福岡市中央区城内2-2-5三の丸スクエア内)

東京

清水美帆

Tokyo  
Shimizu Miho



グエン・バン・クエンとの共作《スクリーン》2020年  
Screen in collaboration with Nguyen Van Quyen, 2020  
Photo by MAP/Heritage Space

ライブイベントや映像作品の舞台セット、衣装などを手がけてきたアーティストで、近年は、夢、人形劇、凧(たこ)などをテーマに、地域コミュニティや専門家との交流を重ねています。福岡ではベトナムの職人と制作した「凧」を出発点に、九州の伝統的な凧文化をリサーチし、人々との出会いやストーリーを反映した作品を創作します。

福岡

山本聖子

Fukuoka  
Yamamoto Seiko



《黒の先に落ちた赤―「おやすみ、いい天気だね。」》2020年  
Red which dropped on tip of Black - "Good night, Good weather, isn't it??", 2020

子ども時代を過ごしたニュータウンでの生活や違和感から、表現を立ち上げてきたアーティスト。福岡では、これまで関心を持ち続けてきた「鉄」や「団地で育った身体」をテーマに、明治以降の産業近代化についてリサーチし、人々の身体性が時代とともにどのように変容してきたのかを映像インスタレーションとして発表する予定です。

### 今年も開催! FaN Week

彩りにあふれたアートのまちを目指し、福岡市が推進する**Fukuoka Art Next**。そのメインとなる**FaN Week**が今年も開催。レジデンスの成果展以外にも、市内各所で様々なアートイベントを繰り広げます。

開催期間 9/16(土)～10/22(日)

会場 福岡市美術館周辺エリア、福岡アジア美術館など

実施概要 福岡アジア美術館コレクション展(中面記事参照)

**Artist Cafe Fukuoka** 体育館での大型展示作品

福岡城跡等を活用したアート作品展示

アートコレクターの所蔵品による「コレクターズ」展

アートフェアアジア福岡2023(マリンメッセB館)など

詳細はコチラ



# FaN

## おいでよ! 絵本ミュージアム2023 FINAL

7階 企画ギャラリー、アートカフェなど 9:30～17:30(入場は17:00まで)

会期中無休 一般1,200円、高大生1,000円、小中生600円、未就学児無料

7/17(月・祝)―8/27(日)

あじびの夏の風物詩「絵本ミュージアム」。これでファイナルとなり、来年からは新たな子ども向け企画が始まります。絵本展の初回からずっと中心で支えてきた高宮由美子さんにお話をうかがいました。

インタビュー 高宮由美子さん

## 「絵本ミュージアム」の長い物語の終わり、そして次の未来へ

あじびの夏の風物詩となった「絵本ミュージアム」。2007年の初開催から1回も途切れなかったんですね。

はい。でも初期の頃は方針が定まっていなくて、2年目は「不思議の森のミュージアム」と題して水木しげるさんの「妖怪大冒険」展を同時開催し、3年目にまた「絵本ミュージアム」に戻りましたが、「ムーミンの世界」展との同時開催でした。4年目の2010年に、絵本の世界を体感しながら美術や造形、先端技術を活用したデジタルコンテンツの体験、絵本とのコミュニケーションを楽しむ今のスタイルが確立しました。

こんなに長く続ける計画はあったのですか。

もとは西日本新聞創刊130周年記念の子どものための企画展として開催された展覧会で、当初は1回限りで終わるはずでした。ですが、16日間で4万2千人も来場してくださり、その反響のすごさは、2回目も開催して欲しいというエネルギーになりました。産官学民の分野を超えた協働のプロジェクトによる子どものためのオリジナルの企画展を、17年間継続開催するという全国的にも類がない独自の展開をしてきたことは、絵本ミュージアムの大きな特徴だと思います。

2020年に新型コロナウイルスの影響で全国の美術館が一斉に休館したときも、「おうちで! 絵本ミュージアム」としてオンライン開催しましたよね。

リアル展示ができなくなったと決まったとき、多くの関係者が「ここで絶やしたらいけない」と強く思い、できることをやってコロナ禍を乗り越えようと企画を進めることになりました。

した。リアル展示を準備してきた制作チームの人たちがオンラインで楽しめるコンテンツをいろいろ作ってくれました。いま考えると、まだ先も見えない中、よくぞやったなと思います。これも絵本ミュージアムが持つ力だと感じています。

数えきれないほどの思い出があるでしょうけど、とりわけ嬉しかったことは?

そうですね。毎回そうですが、会場で、絵本の世界の展示を楽しんだり、絵本を読んでいる親子の姿を見るのは嬉しいですね。この光景があつて絵本ミュージアムの展示が完成すると思つていました。それから、幼い頃に家族と一緒に絵本ミュージアムに来た子どもが成長して、例えば「子ども記者」として取材に来たり、大学生になってスタッフで関わったり、親になって子どもと一緒に絵本ミュージアムに来てくださるのも嬉しいですね。

長年、一緒にやってきた中で、何度か聞いた高宮さんの「美術館で開催することに意味がある」という言葉が印象に残っています。

絵本ミュージアム以前から子どもに関わる活動をしていく中で、子どもが育つたり活動する様々な空間の一つにミュージアムの可能性をずっと感じていました。絵本ミュージアムは、「子どもとミュージアムをつなぐ」ことをコンセプトにしていますが、「子ども」「絵本」「ミュージアム」の3つをそれぞれ同等に価値あるものとして捉え、それぞれが持っている力



を最大限に活かす、可能性を拓く、そうした感覚を大切にしてきました。どれかが上回るのではなく、どれも大事です。美術館を単なる会場として見るのではなく、美術館だからできること。子どもにとっても美術館で本物に出会う機会をつくることで、そこから子どもが持つ本物を見抜く力、いいものを感じる力、自ら学び成長していく力が育まれると思つています。

ついにファイナルを迎えます。毎年テーマを変えられていましたが、ラストに「子どもの力」をテーマにした想いを教えてください。

「子どもの力」って誰しもが持つ当然のものではあるんですが、やはり改めて、その子どもの中にある希望や未来への可能性を伝えたいなと思って。これからの時代、様々な困難や壁があつても、それを乗り越えていく、可能性を拓いていく力を子どもは持つている。絵本ミュージアムを続けてきた中で、展覧会を見てきた子どもたちが5年後、10年後に大人になって、もつと素晴らしい展覧会や企画を創り出していくことと思います。将来、子どもたちのための空間デザイナーとか、絵本関係の仕事に就く人、子どもや美術教育に関わる人も出てくるかもしれない。そんな子どもたちが持つ力、そして可能性にとっても期待をふくらませています。



本展おなじみの絵本作家のいわいとしおさんがメインビジュアルを飾ります。



高宮由美子(たかみや ゆみこ)

NPO法人子ども文化コミュニティ・代表理事として、子どもと大人が共に学び合うコミュニティづくりに取り組み、「絵本ミュージアム」ほかたくさんのお仕事を企画、開催してきた。2022年より独立し、YES ANDの代表・プロデューサーとして活動している。



Welcome to Ehon Museum 2023

# 水のアジア

担当学芸員による作品ガイド  
(趙純恵、栗原ふみ)



空中を回遊する5,000匹もの魚たち

ムルヤナ (インドネシア) 《海の記憶》2018年

Mulyana (Indonesia) *Sea Remembers*, 2018

ムルヤナさんは共同作業を得意とし、本作もジョグジャカルタの村に住む70人の女性たちと作りました。浅瀬から深海まで海をまるごと一つの世界観に落とし込み、浅瀬に生息する色鮮やかな魚や珊瑚、海藻を表現する一方で、深海の海底で眠るクジラの骨もあり、生と死の共存が描かれます。ポップで親しみやすい作品ですが、ムルヤナさんは本作を通して自然破壊に対する危機感を訴えていて、海をこのように美しく表すことで、逆に世界の海の現状を考えるようなアプローチがなされています。(趙)

ジュン・グエン＝ハツシバ(日本／アメリカ／ベトナム)

《メモリアル・プロジェクト ナ・トラン、ベトナムー複雑さへー 勇気ある者、好奇心ある者、そして臆病者のために》2001年



Jun Nguyen-Hatsushiba (Japan/America/Vietnam)

*Memorial Project Nha Trang, Vietnam: Towards the Complex -For the Courageous, the Curious, and the Cowards*, 2001

撮影したのはベトナム中部のニャチャンという都市で、ベトナム戦争終結後、多くのボートピープルがここから脱出し、その中には海に沈んでしまった方々もいます。ベトナム戦争後、労働者たちの貴重な稼ぎ口になったシクロをこの海に沈め、それを若い漁師たちが海中で漕ぐ姿が映し出されます。漁師たちが息をするために海面が上がってはまた潜るという動作を何度も繰り返す様子が印象的です。制作から約20年を経て、ハツシバさんが本展に寄せてくださったテキストとあわせて、会場でじっくりご覧ください。(栗原)

アン・シェンホェ エレン ルルアン

安聖恵／ 峨冷・魯魯安 (台湾)

《アリ・サベ・サベ／土石流、私は未来ですべてを想う》2021年

Eleng Luluan (Taiwan) *Ali Sa be Sa be / Rugged Rock Cliffs, I Miss Everything in The Future*, 2021

安さんは、台湾の先住民族のひとつ「ルカイ族」に生まれました。ルカイ族は山岳民族で、山から採掘した薄い石板を建築材にして暮らしていましたが、2009年に台湾南部を襲った「八八水害」により、一夜にして村が土砂に飲み込まれてしまいます。その後、別の村で暮らし始めますが、安さんは10年後に元の村に戻りこの作品を作りました。上から吊るした網のようなものはルカイ族が住む雄大な山々を、下の編み物は村や家、水の流れを表現しています。安さんはこの作品を通してルカイ族の記憶を残していくと同時に、悲しい記憶を乗り越えようとしているのです。(趙)

サテライト会場(ポートルース福岡)に展示！



安聖恵／ 峨冷・魯魯安(台湾) 《そこにある海》2023年

Eleng Luluan (Taiwan) *The Sea Over There*, 2023

福岡にちなんだ「サバ」のベンチ。なんと横幅10メートルもあり、もちろん座ることもできます。(栗原)

本作の骨組みは台湾から、表面の竹は熊本県から調達しました。日台コラボレーションともいえる作品です。(趙)

世界水泳選手権2023福岡大会記念展

水のアジア

7/1(土)ー9/3(日) 7階 アジアギャラリー

The Commemorative of the World Aquatics Championship – Fukuoka 2023  
Waters in Asian Art

一般1,000円、高大生800円、中学生以下無料

海や川、水滴といった水の姿は、表面から見ると美しく光り輝いています。しかし、海の中には光が届かない暗闇もあり、また様々なストーリーが包み込まれています。本展はそんな光と影が共存する水の世界をイメージして構成されました。作家たちのみずみずしい表現の奥に込められた、その想いとは。



アフ [アフザル・シャーフェー・ハサン] (モルディブ) 《モルディブの物語》2012年

Afu [Afuzal Shaafiu Hasan] (Maldives) *A Maldivian Tale*, 2018

この作品は、近代化以前のモルディブのとある漁師一家の1日をサンドアートで描き、アニメーションにしたものです。当時、モルディブでは漁が生計の中心であり、海は恵みを与える存在であるとともに、時に人間の脅威にもなる存在でした。作品では、海に出た父親の帰りを待つ家族の愛情や、大海原を前にした人間の孤独感などが詩的に描かれています。アフさんは砂にもこだわりがあり、モルディブのビーチでとれる珊瑚砂を使っているそうです。光に透ける砂のグラデーションが非常に繊細で、とても深みのある映像です。(栗原)



キム・ヨンジン (韓国) 《液体ー右から左へ》1995年 Kim Youngjin (Korea) *Fluid-Right to Left*, 1995

映像に見えますよね？ ですが違います。作家手づくりの装置が運動し、ポンプから散水された水滴がプロジェクターのレンズに落ちて拡大投影される仕組みです。実際に展示室の中で水滴が落ちる様子を極端に拡大して見ることになるため、自分が小人になったような気持ちになり、私たちがふだん忘れていた「自然の前において人間はちっぽけな存在である」という感覚を呼び覚ましてくれます。(趙)

実際に見ると、水滴に触れるような錯覚になります。溜まった水滴は刻々と流れ、循環し続けるので、2度と同じ瞬間はありません。まさに生の体験を楽しめる作品です。(栗原)



ひさみを

比佐水音 (福岡／京都) 《いきてはいたる》2019年 Hisa Miwo (Fukuoka/Kyoto) *To come and arrive upon*, 2019

開館から24年経ち、「アジアとは何かを問う」ことが今後のあじびのひとつの姿勢になると感じています。そのうえでアジアを向いて制作を行う日本作家の表現は欠かせず、今回、3名の日本在住作家に出品してもらいました。比佐さんは水や雲のように手で掴めないもの、形を変え続けるものをテーマに制作を続けています。(趙)

現実の景色ではなく、比佐さんの心の中に浮かんだ景色が表現されています。何十回、何百回と繊細に筆を重ねて描かれており、画材も細かく使い分けられていて、例えば月の辺りなどは雲母や水晶によってきらきらしています。また、水面もよく見ると古い絵画の表現を引用していて、日本画の伝統へのこだわりが随所に見られます。(栗原)



キム

金サジ (京都) 《臍》2014年

Kim Sajik (Kyoto) *navel*, 2014

金さんはご自身が在日コリアンであるという背景から、朝鮮半島より伝来した舞や踊りや歌に着想を得ながら、宗教や祭礼空間を自分で造形し、それらを撮影した写真シリーズを発表しています。本展ではそのうち3点を展示していて、この作品では無数のセミの抜け殻が水上に置かれ、そこから一本の蓮が伸びています。現実では交わることのないふたつの生き物が水面に浮かぶその様子は、生と死のふたつを静かにかたどっているかのようです。(趙)

やまうちてるえ

山内光枝 (福岡) 《信号波》2020-23年 Yamauchi Terue (Fukuoka) *Signal Wave*, 2020-23



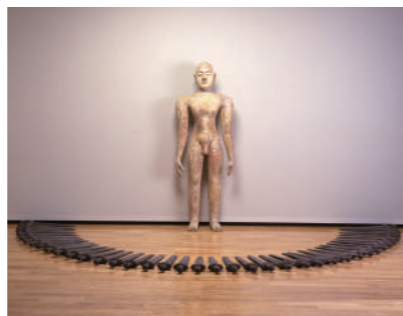
山内さんは、これまで黒潮やフィリピン近海、対馬暖流の島々の人と作品を作ってきました。山内さんが韓国の釜山で出会った海女が「チンジャ(春子)」さんといい、山内さんのお祖母さんも「ハルコ」だったという偶然の重なりから物語が始まります。日本統治下の釜山で生まれ育ち、終戦で引き揚げてきた祖父母を中心とした家族史、そこから見えてきた日韓の近代史をセルフドキュメンタリー映像で綴っています。最後には山内さんが、日韓の歴史を引き受けながらまた海を通じて何を見たらいいのかという、決意表明のようなものを感じる意欲作です。(趙)



イー・ブル(李晔)《さなぎ》2000年  
Lee Bul, Chrysalis, 2000



リン・ティエンミャオ(林天苗)《卵 #3》2001年  
Lin Tianmiao, Spawn #3, 2001



N.N. リムゾン《内なる声》1992年  
N. N. Rimzon, The Inner Voice, 1992



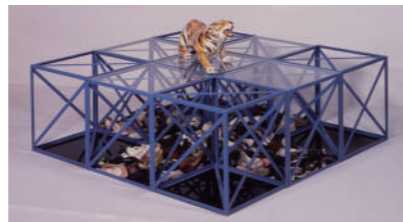
ナリニ・マラニ《略奪された岸边》1993年  
Nalini Malani, Despoiled Shore, 1993



ファン・リジュン(方力鈞)《シリーズ2 No.3》1992年  
Fang Lijun, Series 2 No. 3, 1992



ディン・キュー・レ《南シナ海ピシュクン》2009年  
Dinh Q. Le, South China Sea Pishkun, 2009



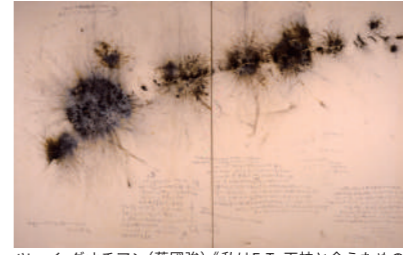
ラシード・アライーン《ティグリス》1992年  
Rasheed Areeen, Tigris, 1992



イ・ウーファン(李禹煥)《線より》1977年  
Lee Ufan, From Line, 1977



ジャン・シャオガン(張曉剛)《若い娘としての母と画家》1993年  
Zhang Xiaogang, Painter with Mother as a Young Woman, 1993



ツァイ・グオチアン(蔡国强)《私はE.T. 天神と会うためのプロジェクト: 外星人のためのプロジェクト No.4》1991年  
Cai Guoqiang, I am an Extraterrestrial: Project for Meeting with Tenjin (Heavenly Gods): Project for Extraterrestrials No. 4, 1991

# アジア、アートに、夢中になる! あじびオールスターが大集合

## Fukuoka Asian Art Museum Collection

# FaN

コレクション室「アジアギャラリー」では、これまで所蔵品を通じて、アジアの近現代美術を歴史的な流れでご紹介してきました。しかし、この秋からの半年間は、いつもと違うアプローチで、現代アジアのアートに出会うことができる展示を準備しています。新しい魅力的な空間で、ぜひエネルギッシュな作品世界に夢中になってみませんか。

9/14(木) — 2024/4/9(火)

7階 アジアギャラリー 一般200円、高大生150円、中学生以下無料

昨年からはじまったFaN(Fukuoka Art Next)事業をご存じでしょうか。アートをもっと身近で日常的に出会うものにしよう、という取り組みです。とくにアジアのアートは、学校教育でも学ぶことがないため、日本や欧米に比べると知られていません。だからこそ、福岡にはアジア美術館があり、展覧会などを通してアジアのアートに身近に会える場と機会をつくっています。「ピカソは知らんぼってん、ジャミニ・ロイ<sup>①</sup>は知っとうと!と自慢する子どもを増やしたい」とは、その願いをかなえるべく中学校の先生に転職したかつての同僚の名言です。本当にそういう子どもや大人が福岡中に現れる日を夢見ています。FaN事業の一環である秋からの展示はきっと「アジアのアーティストを知っとる!」と自慢する子どもや大人を育てるものになるでしょう。展示する10作家のダイナミックな作品は、約5000点の所蔵品から選りすぐった当館コレクションの粋を集めたようなもので、いずれも「アジアのいま」を伝える力を持ちます。同時代の私たちにとって身近なテーマを表現しているそれらは、きっとアジアのアートに親しむきっかけを提供してくれることでしょう。いまを生きる、元気なアジアのアーティストにフォーカスした本展が、みなさまにスペクタクルな作品との出会いをもたらし、新鮮な体験と感動をお届けできることを願っています。

—— 担当学芸員: ラワンチャイクン寿子



①ジャミニ・ロイ《子鹿》1940年頃  
Jamini Roy, Fawn, c. 1940  
※参考作品  
\*reference

## 同時開催

### アートと環境 — 人新世を生きる

9/14(木) — 12/25(月)

Art and Environment – Living in the Anthropocene

環境をテーマとした作品を通じて、変わりゆく地球に目を向け考えていきます。



キリ・ダレナ《トゥンクン・ランギット》2013年  
Kiri Dalena, Tungkung Langit, 2013

## 同時開催

### 「きのう見た夢」はどこへ? — コビール・アフメッド・マスム・チスティ

9/14(木) — 12/25(月)

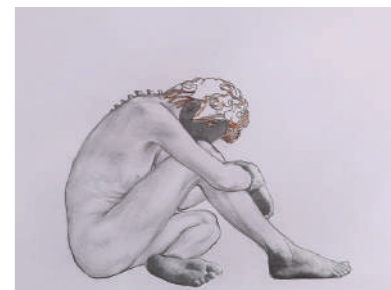
Room for FAAM Residence Program Part II

Where has "The Dream You Dreamed Last Night Gone?" — Kabir Ahmed Masum Chisty

近年、パフォーマンスなどを通して国際的に活躍しているチスティ。2014年のワークショップで約150人の小学生と共同制作したアニメーション作品《きのう見た夢》を展示するほか、福岡での創作活動の一旦を紹介します。



コビール・アフメッド・マスム・チスティ《繭》2014年(部分)  
Kabir Ahmed Masum Chisty, Cocoon, 2014 (part)



あじびレジデンスの部屋第II期